



先輩が母校へ・大高インターンシップ

8月24日（月）、大船渡高校3年生4人が、教職への理解を深める進学インターンシップのため、本校を訪れました。4人は、統合前の旧大船渡中学校・旧末崎中学校の卒業生で、授業準備や参観、養護教諭の業務見学、配属学級での交流などを体験しました。午後の校長とのトークセッションでは、教職の魅力について語り合いました。生徒として通っていた母校を、今度は教師を目指す立場から見つめ、先生方の仕事や生徒との関わりを自分の目で確かめる一日となりました。

その一日を通して、教職についての「一次情報」を自分自身でつかんだ4人の振り返りを紹介します。



教職を目指して母校を訪れた4人の先輩

「理科の魅力を伝える」

教師の仕事には、授業の外からは見えない苦悩があり、優しいだけでは務まらないことを実感しました。一度の授業ですべての生徒に内容を理解してもらうことの難しさを感じました。その中で、どのようにして生徒を引きつけ、興味をもたせるかが大切だと思いました。

また、理科が好きな生徒を増やすために、主に化学の授業を通して、理科の魅力や面白さを伝えたいという思いがさらに強くなりました。教師は、授業の中で生徒の理解を深めることはもちろん、教師と生徒という関係を保てるよう、適切な線引きがしっかりできることも大切だと思いました。

「生徒とともに学び、成長する」

授業準備の大変さや養護教諭の仕事を詳しく知ることができ、特に、先生方が生徒一人一人をよく見て、深い愛情をもって向き合っている姿が心に残りました。自分が中学生だった頃に見ていた教職の姿と、教師を目指す立場から見た教職との間には大きな違いがあり、新たな発見がありました。

トークセッションを通して、教師は知識を教えるだけでなく、生徒と関わりながら自分自身も多くを学び、成長できる唯一無二の仕事だと感じました。天文の写真や動画を撮って授業に生かすなど、日々の工夫にも感銘を受け、生徒への「愛」が教職にとって大切だと思いました。

「見えない努力と対話の力」

先生方が、生徒からは見えないところで一つの授業のために多くの時間を費やし、細かなところまで考え、準備している姿が印象に残りました。そうした努力によって授業が成り立ち、生徒が楽しそうに学んでいることを知り、先生方への感謝と尊敬が一層深まり、仕事の重みも感じました。

トークセッションでは、校長先生から投げかけられた問いに対する答えを言語化する中で、自分の中にありながら、まだはっきりしていなかった気持ちや、自分でも気づいていなかった教職への思いを認識することができました。また、校長先生のお話も大変有意義でした。

「工夫と対応力が支える授業」

授業では、実験器具や教材を5、6班分そろえる必要があり、その大変さを実感しました。さらに、一つの内容を教えるにも様々な方法を考え、器具に不具合が起きたときには、状況に応じて対応しなければなりません。先生がすぐに別の方法へ切り替える姿から、準備と対応力の大切さを学びました。

トークセッションでは、教職を目指すきっかけや、よい教師について、自分とは異なる意見や新たな考えに触れ、教職への見方が広がりました。校長先生の実体験を交えた話から、「新しい世界を実感させる教師」という新しい考えを聞いて、本当に良かったです。

～先輩の言葉から～

4人の先輩は、後輩の皆さんに、限られた学校生活の中で、勉強や行事、友達との時間を大切に、人とのつながりや様々な経験を将来に生かしてほしいと話していました。進路が未定でも、焦る必要はありません。身近な人や物事に目を向け、好きなことややりたいことを見つけ、それを将来の選択につなげてほしいという思いが込められています。

先輩たちが今回のインターンシップで得た学びや、後輩に寄せた言葉も参考にしながら、自分は何を大切に、これからどのように学び、どのような道に進みたいのかを考えてほしいと思います。